

親に見捨てられたけど、
無自覚チートで
街の人を笑顔にします

小さな大魔法使いの 自分探しの旅4

author
藤なごみ

★★★★

絵 駒木日々

登場人物紹介

ザンギエフ

ナディアの兄。大雑把なところもあるが、世話焼き。

ナディア

シークレアの宿の看板娘。
可愛いものに目がない。

モグちゃん

鉱山モグラという魔物の子ども。
レオによく懐いている。

シロちゃん

知能が高く、様々な魔法を使いこなせるスライム。

レオ

色々と不幸な境遇を背負う、
美少年主人公。
無自覚ながらチートな才能を持ち、
関わる人々を幸せにしていく。

ユキちゃん

レオに拾われた幼いコボルト。
マイペースな性格。

フレア

『紅の剣士』という二つ名を持つ
凄腕の魔剣士。

サンダーランド辺境伯領にやってきて、それなりの日数が経過した。

年の瀬が近づくある日、僕——レオは、ここでの魔法の師匠である『紅のフレア』ことフレアさんと、『双剣のミシヤ』ことミシヤさんに戦闘の稽古をつけてもらっていた。

「はあ、えい！ やあ！」

「いい感じよ、どんどん打ち込んできてね」

身体能力を強化する魔法をかけて、フレアさんたちに木剣を振るうけど、フレアさんたちは僕の攻撃を軽々受け止めている。

僕の中ではいい感じに使いこなせるようになったと思っていたけど、こうやって相手してもらっていると、まだ実力の差があるなあ。

「はあはあはあ、うーん、全然かなわないよ……」

僕の隣で、仲間のスライムのシロちゃんもちよつと落ち込んでいた。

「そりゃそうよ。私たちは小さい頃から訓練していたもの。いくらレオ君が天才でも、簡単に抜かれるわけにはいかないわ」

「レオ君も、最初の頃に比べればいい感じに成長しているけどね」

僕とシロちゃんが悔しがっていると、フレアさんとミシャさんがちよつと得意気に言った。

僕が目指している地点は、まだまだかなり先にあるのかも。

ちなみに、モグちゃんは魔法剣を習得していて、今は剣技を覚えようと頑張っている。

それからしばらく打ち込みを続けて、僕たちは今日の訓練を終えた。

この後は、フレアさんとミシャさんと冒険者ギルドで依頼を受けて、実戦に入る予定だ。

僕は汗を拭いて身支度を整えてから、フレアさんたちと冒険者ギルドに向かうのだった。

冒険者ギルドに到着すると、依頼掲示板の前に人だかりができていた。

いつもよりやけに騒がしい。

僕は不思議に思つて、フレアさんとミシャさんの顔を見た。

二人も状況がわからないといった表情で顔を見合わせている。

ぴよんぴよんと一生懸命ジャンプしたけど、人ごみに遮られて、ここからだと掲示板がよく見えない。

やむなく、僕はそばにいる冒険者に話を聞くことにした。

「すみません、何があつたんですか？」

「ああ、どうやら近くの村でオークの群れが現れたらしい。腕に覚えのある冒険者は、ぜひ討伐に参加してほしいそうだ」

剣を背負ったスキンヘッドの大男が状況を教えてくれる。

想像以上に大変なことが起きているみたいだ。

フレアさんとミシャさんは、その言葉に衝撃を受けていた。

すると、ギルドマスターのホークスターさんが頭をボリボリとかきながらこちらに歩いてくる。

「お、さつそく集まっているな。聞いた話だと、出現したオークは百頭以上。すでに軍も動き出すくらいの大騒ぎになっている」

「「ひゃ！」「」

ホークスターさんの言葉が聞こえた冒険者たちが驚愕する。

そんな中、フレアさんとミシャさんは冷静にホークスターさんと情報交換を進めていた。

「すでに複数の怪我人が出ているんですね。助けにいきましょう」

フレアさんの言葉に、ミシャさんが同意する。

「すぐに馬車を用意して、村に向かわないと。のんびりしている時間はないわ」

二人の言葉に僕は頷き、僕たち三人は急いでミシャさんの商会に戻って準備を始めるのだった。

馬車の用意をして、再び冒険者ギルドの前にやってくると、軍の人たちと一緒にサンダーランド辺境伯家の嫡男であるマシューさんが完全武装した姿で立っていた。

僕の姿を見つけるなり、声をかけてくれる。

「レオ君、色々と負担をかけてすまない。僕は軍の指揮と村の状況確認を任されて来たんだ。父ほどではないが、こう見えても武芸の心得はあるから、自分の身は守れる。安心してほしい。まあ、指揮に専念するから前線に出ることはないだろうけど」

マシューさんがにこりと笑顔を向けつつ、やってきた理由を話してくれた。

話している間に、冒険者ギルド前に多くの兵と冒険者が徐々に集まってくる。人数が揃うと、大勢の人に向けて、マシューさんが威勢よく呼びかけた。

「オークの脅威に苦しむ村人を、一刻も早く救わなくてはならない。勇猛な諸君の活躍を期待する」

「『おー！』」

マシューさんの言葉に呼応して、皆が拳を突き上げた。

こうして、村を救う臨時部隊が結成され、冒険者ギルド前を出発したのだった。

パカパカパカ。

サンダーランド辺境伯領の領都を出発して二時間が経った。

僕たちを乗せた馬車は、道中何事もなく順調に進んでいた。

しかし、もう少しで村に着くというところで、街道の先から黒い煙が立ち上っているのが目に入った。

「あれは炊事とかの煙じゃないわね。真っ黒だわ」

「少し急ぎましょう。村の様子が心配だわ」

フレアさんとミシャさんは、すぐに異変を察知した。

僕たちを乗せた馬車が少しスピードを上げる。

程なくして村のすぐそばまで来たが、そこには驚きの光景が広がっていた。

「『ブモー！』」

なんと、村を守る木の柵の周りに見たことない大きな魔物がいたのだ。

道中に見えた黒い煙が、村の中から出ていたこともそこで判明する。

「なっ!? オークだけじゃなくて、上位種のオークジェネラルまでいるわ」

「となると、オークキングがいる可能性もあるわね」

フレアさんとミシャさんが、状況を素早く分析する。

一緒にいた軍の人や冒険者もすぐに状況を理解して、村に向かって走り出した。

「レオ君、村人がすでにオークと戦っているから援護しましょう。巻き込まないように注意して魔法を使ってね」

「頭部を狙うといいわよ。どんな魔物でも、頭部が弱点なことが多いから」

フレアさんとミシャさんのアドバイスを受けながら、僕はナイフをシロちゃんとモグちゃんに預けた。

僕が離れている間のマシューさんの護衛を任せるためだ。

「サンダーランド辺境伯領の勇猛果敢な者たちの力の見せどころだ。オークを駆逐^{くちく}して、村を救うぞ」

「「おう！」「」

剣を抜きながらマシューさんが言い放ち、その言葉を聞いた皆がオークの群れに突撃していく。僕もシロちゃんたちにマシューさんのことを託して、オークのほうに向かっていった。

「はあ、せい！」

「やあ、とー！」

ザシュ、ザシュ、ザシュ。

「「ブギー！」「」

軍や冒険者の他の人たちより一足早く、僕、フレアさん、ミシャさんはオークとの戦闘を開始していた。

フレアさんとミシャさんは、華麗な剣捌きで体長二メートルを超える大柄なオークを次々と倒していた。

僕も魔法剣を発動したダガーを手にして、オークの首を切断していく。

周囲に誰もおらず、人を巻き込む心配がない時は、エアーカッターでオークの首を刎^はねとばした。オークは動きが遅いので、上手く他のオークを利用して相手の攻撃をかわしながら、戦っていく。

オークたちは、仲間が倒されてもまったく怯^{ひる}むことなく僕たちに向かってくる。

「小さな冒険者に負けるな！ 辺境伯家の兵の力を示すのだ！」

「先輩冒険者の意地を示すぞ!!」

兵たちも、互いに連携を取りながらオークを確実に倒していた。

オークの強烈なパンチを大きな盾で受け止めたり、足を攻撃して体勢を崩してからトドメを刺したりと、それぞれ抜群のコンビネーションを見せている。

みんなの頑張りの甲斐あって、オークは徐々に減っていき、なんとか村の入口に群がっていた約三十頭のオークを倒し終えた。

近くにオークがいなくなったことを確認した僕は、門の前に倒れている怪我人の治療をすぐに始めた。

シュイン、ぴかー！

「あの、大丈夫ですか？」

「ああ、助かった……あつ!? オークは村の中にも入り込んでいるんだ！ 早く行かないと」

一人の若者を治療すると、目を覚ました途端、そう叫んだ。

若者の声を聞いたマシューさんが、再び指示を飛ばす。

「村の中に入ったオークを一匹残らず殲滅^{せんめつ}するのだ。これ以上、村に被害を出すわけにはいかない」

「おー！」

軍と冒険者の人たちが声を上げ、村の様子を見に行く人たちと入口の警備をする人たちに担当を分け始めた。そして、村の中の確認へ向かっていく。

その間に、マシューさんは通信用魔導具を使って増援を要請していた。

僕は、念のために広範囲に探索魔法をかけて、周囲にオークがいないかを確認した。

「マシューさん、まだ村の周りに何か反応があります！」

すぐに反応を感じ取ると、僕はマシューさんに報告する。

「わかった。申し訳ないが、増援が来るまで三人は村の周りにいるオークを倒してくれ」

「はい！」

マシューさんの指示を受けて、僕たちはすぐに反応のあったほうに走り出す。

「ブヒャー！」

「まずは、前にいる三頭の首を魔法で切り落とします！」

僕がそう伝えると、フレアさんとミシャさんが頷きます。

「了解。一気に片付けるわよ」

「二人とも怪我には注意してね」

こうして僕とフレアさんとミシャさんは、僕のエアーカーターと二人の剣技をあわせて戦い、どんどんオークを倒していった。

討伐したオークは、マシューさんに報告するために魔法袋に次々しまっていく。

身体能力強化魔法を使った状態で走るのにも慣れてきたおかげで、移動もあつという間だ。

追加の冒険者が到着する前に、僕たち三人は村の周りにいたオークを倒しきってしまった。

村の周りを一周してオークが外にいないことを確認してから、村の広場で指揮を執っていたマシューさんに合流する。

魔法袋から倒したオークの素材をまとめて取り出して、マシューさんに見せる。全部で四十頭はいるなあ。

「マシューさん、村の周囲にいたオークはフレアさんとミシャさんとともに倒しました」

「そうか、助かった。村の中にいたオークも倒し終えたよ。村人は、オークから逃れるために教会に逃げ込んでいたみたいで、大きな被害は出ていない。数名死者が出たが、他は軽傷で済んだ。このくらいなら、兵が用意したポーションで事足りる」

全員助けることはできなかったのか、と僕は思わず悲しい気持ちになりました。

その横で、僕の代わりにシロちゃんが倒したオークの血抜きをしてくれました。

ともあれ、緊急対応はこれで完了です。

しかし、マシューさんは警戒を緩めていませんでした。

「レオ君たちは、治療に参加しないでゆっくりと休んだほうがいい。まだオークの残党がいる可能性があると思って、万が一の出撃に備えてくれ」

本当は治療の仕事にも参加しなかったけど、身体能力強化魔法を使つての戦闘が初めてだったこともあり、いつもより体力の消耗も少し激しく、結構疲れてしまった。

そんな僕の様子をマシューさんは察していたみたいだ。

「私もちょっと休むわ。さすがに疲れました」

「私もです。毎朝の訓練を再開してなければ、もっと早く体力が尽きていたかも」
フレアさんとミシャさんが、地面にぺたりと座り込んだ。

さすがに、あれだけの数のオークを討伐するのは、いくら二つ名持ちのフレアさんとミシャさんといえども楽じゃなかったみたいだ。

僕が魔法で水を生み出してみんなで飲んだり、魔法袋からドライフルーツを取り出して甘いものを補給したりして、僕たちは休息をとった。

周囲を見回すと、オークが暴れたことが一目で分かるような無残な有様が広がっていた。破壊された家なんかも目に入る。

フレアさんとミシャさんは、そんな様子を見て何か考え込んでいた。

休憩が終わり、追加の兵と冒険者が村に到着した。

増援のみなさんは、マシューさんに到着の挨拶をしてから、すぐに村の周囲の警備に入った。

教会前では炊き出しが行われ、それぞれが村の復旧に向けて動き出していた。

そんな中、一人の冒険者がフレアさんにある提案をしてきた。

「フレア、レオのスライムが血抜きしたオークを解体させてほしい。住民への食料にするが、その前に仮説を確かめたい」

「奇遇ね。私も休憩しながら同じようなことを考えていたわ」

そのまま、近くにいるマシューさんにすぐに許可を取り、僕たちは解体を始める。

マシューさんと護衛の兵もオークの解体に興味があるようで、僕たちの手元を覗き込んでいた。

「レオ君、ついでだからもう二頭解体しよう。私も皆と同じ疑問を持っている」

マシューさんが提案し、さらに解体を進める。

マシューさんまで同じ疑問を持つなんて、いったいどういうことだろうか。

兵の力も借りて、どんどんオークが解体されていく。

僕は怪我や病気で弱っていた村人をシロちゃんとともに治療し、フレアさんとミシャさんは、兵とともに村人から聞き込みを始める。

「となると、オークの襲撃は突然だったんですね」

「ああ、今まではオークと遭遇しても、いきなり襲ってくるなんてことはなかった。こんな大多数の襲撃なんて、生まれて初めてだ」

「そう、それは大変でしたね」

ミシャさんはお爺さんから話を聞くと、顎に手を当てて何やら考えた。

オークは普段と違う動きだったんだね。

オークを解体していた冒険者が、いきなり大きな声を上げた。

「どいつもこいつも、胃の中が空っぽだぞ。食料目当てで村を襲ったみたいだな」

その言葉を聞いて、多くの冒険者と兵が周りに集まり、解体されたオークを見ながら意見交換が始まった。

オークは食欲旺盛^{おうせい}なので、胃の中が空っぽってことはほぼないという。

この結果を聞いて、マシューさんがすぐに僕たちに指示を出した。

「現在冒険者と兵に周囲の偵察に行かせているが、もし仮説が正しなければさらなるオークの襲撃の危険性がある。各自、再襲撃に備えて準備をするように」

「『おー！』」

「プイ！」

兵と冒険者にあわせて、モグちゃんも可愛らしく声を上げた。

僕、フレアさん、ミシャさんは万が一のための切り札として、いったん待機を命じられた。

待っている間に、モグちゃんは村人のお手伝いに呼ばれていた。

「プイー！」

シュイン、ズゴゴゴゴ。

「すげー、あつという間に土のドームができたぞ……」

ふと声のするほうを見たら、村の隅の使っていないスペースに、モグちゃんが土魔法を駆使して複数の土のドームを作っていた。

村の半数の家に何らかの被害が出ていたから、一時的な住居にするみたいだ。簡易的にでも夜露を凌げる場所があれば、気持ちもだいぶ違ってくるんだろう。

手の空いた兵と冒険者が壊れた家の仮修復を行っているけど、それはまだ直すまでに時間がかかりそうだからね。

「仮設でも、住むことができれば全然平気です。危うく村が全滅するところでしたから」

村人は努めて明るく振る舞いながら、そう話してくれた。

住居の損害だけでなく、十人以上の死者が出ているから、ショックも大きいだろうと思っていたけど、あの規模のオークの襲撃にしては、被害が奇跡的なまでに少なかったと言っていた。

オークの襲撃が収まらないと葬儀を行うのも難しい。

遺体はシートに包^{くる}んだうえで、僕が生活魔法できれいにして氷魔法で凍結させた。

こうして早朝から行っていたオーク討伐は、日が傾き始めた頃には何とか落ち着きを取り戻したのだった。

「フレアさん、ミシャさん、マシューさん、今日は村に泊まるのですか？」

他の冒険者がテントを立て始める中、僕はフレアさんたちに尋ねた。

「もちろん泊まるわ。まだオークの脅威がなくなったわけじゃないからね」

「テントがあるから、村人の負担にもならないしね。他の冒険者も同様よ」

フレアさんとミシャさんは、野営に必要なもの一式をしつかり持ち歩いてみたいだ。

冒険者の中には、寝袋さえあれば十分という猛者もいた。

マシューさんは部下に設営してもらったテントで休むそうだ。

そこに、斥候に出ていた兵がやってきて、マシューさんに何やら報告する。

話を聞き終えると、マシューさんはすぐに兵と冒険者を集めた。

僕たちもマシューさんのそばに向かう。

マシューさんの反応を見る限り、どう考えてもいい話じゃなさそうだ。

「斥候から報告があった。およそ五十を超えるオークが、この村を目指している。さらにオークキングらしき存在も確認された。厳しい状況だが、ここが踏ん張りどころだ！」

「「うおー」」

日中十分に休んでいるので、兵も冒険者も元気いっぱいだ。

もちろん、僕たちもやる気満々だ。

すぐに、オーク攻撃班と村の防衛班に分かれて行動を開始する。

僕、フレアさん、ミシャさんは攻撃班、シロちゃん、モグちゃんはマシューさんの護衛兼防衛班に配属された。

「シロちゃん、モグちゃん、マシューさんと村を頼んだよ」

「ブイ！」

僕がシロちゃんとモグちゃんに声をかけると、シロちゃんたちは特製ナイフを装備して気合十分そうに返事した。

これなら村は大丈夫だと思い、僕たちは勇んでオークが向かってくるという森に向かう。

村近くの森の前に到着したところで、僕は広範囲に探索魔法を発動した。

シュイン、もわーん。

「あつ、何かの大群がもう間もなくこちらに現れます！」

「オークが来たみたいだな。ここで撃退するぞ」

僕の報告を聞いて、兵の偉い人がすぐに周囲に指示を出した。

同時に、作戦を手早く僕たちに伝えてくれる。

僕、フレアさん、ミシャさんは、声を出さずにこくりと頷いた。

ガサガサ、ガサガサ。

「「ブモー！」」

「「うおー！」」

程なくして茂みからオークの大群が姿を現すが、刹那、待ち構えていた兵と冒険者が一気にオークに襲いかかった。

きちんと準備をしていれば百戦錬磨の兵と冒険者にとってオークは敵ではなく、オークの大群はなすすべなく討伐されていく。

「グオー！」

「はあああ！」

突然の奇襲にオークキングも手にしている斧を振り回しながらなんとか応戦しようとするが、フレアさんとミシャさんが身体能力強化魔法を駆使してオークキングを翻弄する。

その間に僕は一撃でオークキングを倒すために魔力を溜めた。

これが偉い人から聞いた作戦だ。オークキングを最初に倒せば、オークは統制が取れず一気に倒せるという話を教えてくれたのだ。

シュイン、シュイン、シュイン。

「フレアさん、ミシャさん、オッケーです！」

「レオ君、後は頼んだわ」

フレアさんとミシャさんが素早くオークキングから離れたタイミングで、僕は溜めた魔力をオークキング目がけて一気に解放した。

シュイン、シュイン、ザシュ！

「……」

ドーン！

僕の放った強力なエアカッターは、狙い通りにオークキングの首を刎ねとばす。

オークキングが首から血を噴き出しながら仰向けに倒れた。

だが、上手くいったと思った次の瞬間――

ミシミシミシ、ズドン、ズドン、ズドン……

なんと、オークキングの後ろに生えていた複数の木が、大きな音を立てて倒れたのだ。

僕は魔法を放った体勢のまま固まってしまい、フレアさん、ミシャさん、オーク、兵、冒険者も木が倒れたほうを向いて啞然としていた。

エアカッターに魔力を込めすぎちゃったみたい。

てへっ。

「の、残りの倒さないで。僕も剣で戦います」

僕は思わず頭をポリポリとかきながら、みんなに声をかけた。

「お、おう、そうだな。行くぞ、野郎ども」

「「おー！」」

何とか我に返った兵と冒険者によって戦闘が再開し、リーダーを失ったオークは次々と倒れていった。

もちろん、僕、フレアさん、ミシャさんも剣を手にしてオークを倒していく。

それからまもなくして、オーク撃退が完遂されたのだった。

オークを倒し終えた僕たちは、手分けして周囲の確認を始めた。

念のためにもう一回広範囲探索魔法を使ったけど、僕たちの周囲に危険な反応はなかった。

「しかし、きれいにバツサリといったな。レオ、切り倒した木も魔法袋に入れておけ。壊された建物の修復に使うぞ」

みんなが倒したオークを魔法袋に入れていると、冒険者が僕に声をかけてきた。

よく見ると、二十本以上の大木が倒れているね。

本気になると、なかなか魔力調整が難しいんだよなあ。

そんなことを思いながら、僕はほとんど倒れた木を魔法袋に収納していった。

ちなみに、誰が何頭オークを倒したかはそれぞれきちんと把握している。報酬を加算する際の基準になるという。

倒したオークは、僕が責任もって冒険者ギルドに納品することになった。

確認を終えて、僕たちは再び村へ戻る。

広場で指示をしているマシューさんのところに向かい、すぐに兵の偉い人が報告を始める。

その間に、シロちゃんに血抜きをしてもらうために倒したオークをまとめて広場の空きスペースに取り出した。

ドサッ。

「おお、これはすごい。首がきれいに落とされているのを見ると、オークキングはレオ君が倒した

んだね」

「はい。フレアさんとミシャさんが、魔力を溜める時間を稼いであげたおかげです。でも、魔力を溜めすぎて木まで切り倒しちゃいました」

「ははは、豪快にやったね。木は色々と利用できるから、まったく問題ないよ」

マシューさんが報告を聞いて、にこりと笑う。

シロちゃんがあつという間にオークの血抜きをしてくれたおかげで、ほとんど傷まないうちにオークを再び魔法袋に収納できた。

あつ、そうだ。このオークキングが使っていた大きな斧はどうしよう。

「マシューさん、これどうしましょう？」

「普通の討伐ならレオ君のものになるが、今回はサンダーランド辺境伯家と冒険者ギルドが連携した依頼になる。いったん冒険者ギルドに卸して、その後にオークションにかけてから得た収入をレオ君に渡すことになる」

あつ、そういう扱いになるんだ。

でも、今でも十分お金をもらっているから、これ以上あつても使い道がないんだよな。

「マシューさん、斧のお金は全部村に寄付します。僕はもう十分にお金を持っています」

「ふふ、レオ君らしいね。では、そのようにしよう」

マシューさんが、にこりとしながら僕の頭を撫でる。

フレアさんとミシャさんも僕の頭を撫でてくれた。

こうして、オークの再襲撃も怪我人をほとんど出さずに収束したのだった。

夜になり、炊き出しの食事をいただいた僕は、そのまま早めに寝ることにした。

予定通りフレアさんとミシャさんと一緒にテントで寝ることになり、そこにマシューさんの護衛をしていたシロちゃんとモグちゃんも合流した。

シロちゃんとモグちゃんも、それぞれ大活躍だったね。

おや？　そういえばシロちゃんに渡した親方さん特製ナイフはどこに？

モグちゃんは明日も持っているからと剣を振って見せてくれたのだが、シロちゃんのはどこかでなくしちゃったのかな？

すると、シロちゃんが触手を振って違うよと否定した。

シュッ。

そして突然、シロちゃんは何もないところから特製ナイフを取り出して触手で持っていたのだ。

シロちゃんの行動に僕とフレアさんはものすごくびっくりしたが、ミシャさんだけ腕を組んで何か考えていた。

「もしかして、シロちゃんはアイテムボックスを使っただけじゃないかな」

ミシャさんが言ったのが正解だったらしく、シロちゃんは同意を示すように震えていた。

シロちゃん曰く、オークキングやオークの血抜きを大量にしたらパワーアップしたようだ。

「プイプイ！」

モグちゃんも、フレアさんとミシャさんと一緒にシロちゃんにすごいと言って盛り上がりつつあった。

僕は魔法袋に入れていたシロちゃん分の荷物をシロちゃんに預けた。

アイテムボックスが使えれば、自分で持っていたほうが良いよね。

すると、フレアさんが僕にある質問をしてきた。

「レオ君、シロちゃんがアイテムボックスを使えるようになって悔しいって思った？」

どうやら、フレアさんはシロちゃんが魔法を先に使えるようになったことでの僕の気持ちを気にしていたみたいだ。

でも、僕の中ですでに答えは決まっていた。

「純粹にシロちゃんすごいって思ったし、僕も負けないぞって思いました」

「そっか、レオ君らしいね。お互いにいい関係なんだね」

フレアさんは、僕の回答を聞いて微笑んだ。

僕にとつて、シロちゃんもモグちゃんも大切なお友達だし、競い合うことはあっても恨む気持ちはまったく湧かなかった。

モグちゃんも、シロちゃんに負けないぞと張り切っている。

そんな話をしているうちに睡魔がやってきて、僕はシロちゃんとモグちゃんと一緒に寝袋に潜り込んだらあつという間に眠ってしまったのだった。

翌朝、僕たちは早めに起きてテントなどを片付けた。

天気は晴れていて、少し空気が冷たいけど気持ちよい朝だった。

炊き出しのお手伝いをしようと準備を進めていると、兵から報告を受けたマシューさんが僕に話しかけてきた。

「レオ君、おはよう。昨日はありがとう。実は、周囲の巡回を行っていた兵が森で珍しいコボルトを発見したらしい。怪我をしているので見てほしいそうさ」

それは大変だと思い、すぐに怪我をしたコボルトを僕たちのところに連れてきてもらおう。

程なくして、タオルに包まれた真っ白な毛並みのコボルトが運ばれてきた。

「すぐに治療しますね」

「プイ！」

真っ白なコボルトは気絶していて、少し痩せている上に複数の怪我を負っていた。

だいたいモグちゃんくらいの大きさの女の子ですね。

シロちゃんとモグちゃんが少し心配そうに見る中、僕はすぐにコボルトに回復魔法をかけた。

シュイン、ぴかー！

「アオン？」

治療の効果があつたのか、真っ白なコボルトはすぐに目を覚ました。



生活魔法で体をきれいにしてあげると、シロちゃんがコボルトに触手をふりふりしながら話しかける。

シロちゃんは、僕たちに何故このコボルトが森の中で倒れていたのかを教えてください。

「独り立ちしたばかりで、あのオーク騒ぎに巻き込まれたみたいです。何とか逃げ切ったんだけど、疲れて倒れちゃったそうです」

「そういうことね。きつと森の中にいた多くの動物も、このコボルトみたいにオークによる被害を受けたでしょうね」

「キューン……」

フレアさんは、コボルトの頭を撫でながら冷静に状況を分析していた。

そういえば、オークを倒した後も森の中の動物がちらちら様子を窺っているのを見た。人だけでなく動物たちも今回の騒動に怯えていたのだろう。

そこで、シロちゃんが僕に衝撃を与える一言を放つ。

「ええー！ シロちゃんが、コボルトに『ユキちゃん』って名前を付けちゃいました。僕たちと一緒に行くって言っているそうです」

「アオン！」

シロちゃんだけでなく、モグちゃんもユキちゃんに僕たちのことをあれこれ話していた。

ユキちゃんが水魔法と回復魔法の素質もあることを知って、シロちゃんたちも一緒に連れていき

たいと思ったのだとか。

「ふふ、とっても可愛いお友達がまた増えたわね。レオ君ならしっかり育てられるはずだから大丈夫よ」

「ユキちゃんは、とても優しいような性格ね。回復魔法の使い手が増えるのは、いいことだと思う」

フレアさんとミシャさんも、ユキちゃんが加わることを歓迎していた。

こうして、僕に新しいお友達ができた。

マシューさんにもすぐに報告したけど、フレアさんたちと同じようにレオ君が主人なら大丈夫だねと言って、ユキちゃんの頭を撫でたのです。

パカパカパカ。

「プイ？」

「アオン？」

みんなで朝食の炊き出しを手伝って食べ終わると、村に追加の兵の一団がやってきた。

足音を聞いて、モグちゃんとユキちゃんが反応する。

マシューさんは、この部隊に引き継ぎが完了したら、僕たちの仕事は終わりで、領都に戻ることになると教えてくれた。

すると、兵とともにやってきた一台の馬車から僕たちもよく知る二人の人物が降りてきた。

「母上、司教様、お忙しいところ申し訳ありません」

「これは、サンダーランド辺境伯領の一大事です。できれば旦那も来たいと言っていました」

「この村は、領都の聖職者が定期的に巡回しておる。何人もの尊い命が失われたのだ。儂が吊^{とど}つてやらなければならない」

マシューさんのお母さんのチェルシーさんと、この街の司教のブラッドリーさんです。

マシューさんは、二人に深々と頭を下げていた。

僕たちも、チェルシーさんとブラッドリーさんのところに向かう。

「逐一報告を受けていたとはいえ、レオ君たちが無事なのを見られて、本当に安心したわ。オークキングまで現れたと聞いた時は、とても心配したのよ」

「レオ君は、村の者たちの亡骸^{なきがら}を丁寧に扱ってくれた。教会の者として本当に感謝する」

チェルシーさんとブラッドリーさんは、僕たちの無事を喜びつつも、村の惨状に心を痛めていた。挨拶を終えてから、僕はさつき仲間に加えたユキちゃんのことをチェルシーさんとブラッドリーさんに紹介した。

「とても可愛らしいコボルトね。レオ君の指導を受けたら、きっと優秀な治癒師になれるはずよ」

「レオ君は、オークの被害を受けた魔物にも優しく手を差し伸べるのか。さすが、『黒髪^{くろかみ}の天使様』じゃ」

チェルシーさんもブラッドリーさんもすんなり受け入れて、ユキちゃんを可愛がってくれました。ただブラッドリーさんの話しぶりだと、新たな僕の逸話になっちゃいそうです。

「さあ、レオ君たちも準備ができたら町に戻らないとね。町の人も、村に行った人たちが無事に帰ってくるのかとても心配していたわ」

「私も、調整が終わったら町に戻る。レオ君たちは、冒険者ギルドに行って倒したオークの取り扱^といについて確認したほうがよいだろう」

チェルシーさんとマシューさんは、前線で戦っていた僕たちのことを特に気にかけてくれた。

フレアさんとミシャさんとも話をして、もう少ししたら他の冒険者とともに町に戻ることになった。

少し時間ができたので、僕は集まっている人に相談して教会に向かった。

やろうと思っていたことがあったのだ。

教会内にはすでに多くの村人が集まっていた。一緒に戦ってくれた冒険者や兵の姿もあった。教会内に集まっている人々に、ブラッドリーさんが声をかける。

「これから、『黒髪^{くろかみ}の天使様』が奇跡を起こす。心しておくように」

ブラッドリーさん、その言い方にはちよつと語弊がありますよ。

僕は苦笑しながら、溜めていた魔力を一気に解放した。

シュイン、シュイン、ぴかー！

「お、おお。す、すごい……」

「これが、『黒髪の天使様』が起こす奇跡……」

教会内に集まっている人から、感嘆の声が漏れていた。

僕が放った魔法は、ごく普通の生活魔法なだけけど、村の人からは奇跡だと感激されてしまった。村の教会内のありとあらゆるところが、新品みたいにピカピカになっていく。

「ふう、これで完了です。やっぱり、きれいな環境で亡くなった人を送ってあげたいですよね」

「レオ君は、我々の気持ちをよく理解しておる。レオ君のおかげで、村を守り抜いた勇者の魂を、安らかに送り出せるぞ」

ブラッドリーさんは、にこりと微笑みながら僕の頭を撫でてくれた。

村の人々からとても感謝された。中には涙を流しながらお礼を言ってくれる人もいた。

こうして、僕たちは村の人に見送られながら、領都に帰るのだった。

「そうか、レオ君はそこまでしてくれたのか。サンダーランド辺境伯領を預かるものとして、改めて感謝する」

村から領都に戻った僕たちは、その足で冒険者ギルドに向かった。

すぐにギルドマスターの執務室に入れてもらおうと、ホークスターさんと一緒にボーガン様も僕たちのことを出迎えてくれた。

説明の時間が省けるだろうと気を利かせて、ボーガン様はわざわざ冒険者ギルドまで足を運んでくれたみたいだ。

大体の報告はマシューさんから届いていたみたいだが、改めてフレアさんとミシャさんがユキちゃんのことも含めて説明してくれた。

ホークスターさんとボーガン様が真剣に二人からの話を聞き、話が終わると、ボーガン様は座ったまま僕たちに深く頭を下げた。

領主様から頭を下げられて、フレアさんとミシャさんはかなり恐縮していた。

「サンダーランド辺境伯軍は、治安維持のために周辺に棲む魔物の生息域をだいたい把握している。だが、今回のオークの大群は我々も知らないもので、想定外のケースだった。間違はなく、レオ君たちがいなければ死者はもっと増えていただろう」

ボーガン様が話す隣で、ホークスターさんも状況を冷静に分析していた。

今回は、たまたま軍の定期巡回が村に来たことで、すぐにオーク襲撃の報告が領都に入って対処できたみたいだ。

「周辺の村への巡回を強化し、何かあったらすぐに対応する。辺境伯領軍は、厳しい訓練をしているからかなり強いぞ」

「あつ、そういえばオーク相手でも、軍の皆さんが連携プレーで普通に倒していました。冒険者もとっても強かったです」

「ははは、我が軍の実力は『黒髪の魔術師』のお墨付きか。まあ、そういうことだから、あとのことは任せて、三人はゆっくり休んでいろ」

僕が兵の強さを褒めると、ボーガン様は嬉しそうに笑っていた。

そして、話題は僕たちが討伐したオークについて変わった。

「倒したオークの数がすごいから、三日に十頭の割合でギルドに卸してくれ。いっぺんに渡されても、さすがに職員が対応しきれない。報酬計算も時間がかかりそうだから、少し待ってくれ」

僕たちはホークスターさんの指示に頷いた。

急いでお金を必要としているわけでもないし、問題ないね。

これで話はまとまったかな、と思ったところで、最後にボーガン様が口を開く。

「それから、三人を村を守った功労者として新年の挨拶に招待したい。来てくれるか」

もちろん、ボーガン様からの招待を断るわけにもいけないので、僕たちはすぐに頷いた。

そして用事は終わり、僕たちは執務室を出た。

帰り際にオークを卸してから、ミシャさんの商会に戻る。

ミシャさんのお父さんを見つけると、商店街を挙げて村を支援するためにすでに段取りを組んでいると教えてくれた。

フレアさんのお父さんも支援のために色々と準備をしているみたいで、サンダーランド辺境伯領の人はとても優しいと改めて思ったのだった。

村でのオーク騒ぎが一段落すると、あつという間に新年を迎えた。

今年で僕は六歳。ちよっとお兄さんになった。

ミシャさんのお店で軽く新年の挨拶をして、すぐにきちんとした服に着替える。

もちろん、サンダーランド辺境伯家で行われる新年の挨拶に伺うためだ。

フレアさんのお父さんとミシャさんのお父さんも招待されていることを知って、フレアさんもミシャさんはかなりホッとしていた。

「うーん、やっぱり正装しているところを見ると、レオ君はすごいって実感するよね」

「服に付いているすごい数の勲章が、『黒髪の魔術師』の逸話が本当だと物語っているわ」

フレアさんとミシャさんは髪色に合わせたドレスを身につけていて、その上にコートを羽織っていた。

フレアさんのお父さんとミシャさんのお父さんも、僕の服を見てすごいと褒めてくれた。

町は新年のお祝いムード一色で、華やかな雰囲気になっている。

そんな中、僕たちはサンダーランド辺境伯家の屋敷に到着した。

「皆さま、お待ちしておりました。会場にご案内いたします」

顔見知りの従者さんが、玄関ホールで出迎えてくれた。

いつもよりもビシッとしていて、とってもカッコよかった。

二階のホールに案内されると、すでに多くの人が集まっていた。

その中にはオーク討伐で実績を上げた冒険者や兵もおり、僕たちの顔を見ると手招きしてくれた。そこに、チェルシーさんがやってきて僕たちに声をかけてきた。

「あら、皆さん来ていただいたんですね。新年おめでとう」

「「おめでとうございます」」

「プイ！」

「アオン！」

僕たちだけでなく、モグちゃんたちも元氣よくチェルシーさんに挨拶をした。

そのままチェルシーさんが僕たちを誘導する。

「そうそう、レオ君たちはこっちよ」

「「えっ!?」」

僕、フレアさん、ミシャさんは、チェルシーさんに連れられて席を移動した。

シロちゃんたちは、ミシャさんのお父さんのところにいるとアピールしていた。

「では、ここで待っていてね」

なんと、チェルシーさんに案内された場所は会場の一番前だった。

えっ、本当にここでもいいの？

チェルシーさんに確認したけど、間違いならしい。

恐る恐る席に座ると、周囲の人が僕たちをチラチラと見ていた。

どうしようと思っていたら、ボーガン様がホール内に現れる。

ボーガン様の挨拶が始まり、僕たちはその場に起立した。

「それでは、これより新年の挨拶を行う。昨年は帝国との小競り合いから始まり、災害による街道封鎖やオークの襲撃もあった。しかし、皆の力を結集して困難を乗り切ることができた。皆に深く感謝をする」

会場内から大きな拍手が起きた。

そういえば、ここに来る前に、土砂崩れで塞がった街道の修復を手伝ったこともあったつけ。

オークが村を襲った事件の印象が大きくて、すっかり忘れていた。

「そこで挨拶に先立ち、街道の災害対策、多数の民の治療、オーク討伐の功績を称えて、サンダーランド辺境伯家からレオ君に勲章を授ける」

パチパチパチ！

えー、そんな話聞いてなかったのに！

周りから大きな拍手が起きている中、僕はちよっと混乱してしまった。

フレアさんとミシャさんも、納得した表情を浮かべながら僕に拍手を送っていた。たくさんの拍手に包まれながら、僕は席を立ててボーガン様のところに向かった。

「ボーガン様、黙っているなんて酷いですよ」

「ははは、慥然とした表情だな。黙っていたのは悪かったが、こうでもしないとレオ君は受け取らんのだろ。だが、どうしても感謝の印として受け取ってほしくてな」

ボーガン様はそう言って、僕の服に勲章を着ける。拍手の音が一際大きくなった。前に出たままの僕に、ジュースが入ったグラスが渡される。

「それでは、新しい年を祝って乾杯する。乾杯！」

「『乾杯！』」

僕もボーガン様の乾杯の挨拶とともに、グラスを高く掲げた。

やっと終わったと思っただけ、僕はそのままだにしていることになってしまった。

すぐに来賓からボーガン様への新年の挨拶が始まり、僕もそれに巻き込まれたのだ。

出るに出不れずといった状態の僕を見ながら、フレアさんとミシャさんは、気の毒そうな表情で美味しそうなお肉を食べていた。シロちゃんたちに至っては、僕をまったく気にする素振りもなく、料理を堪能していた。

「ううう、疲れたよ……」

「お疲れ様。立派に挨拶できていたよ。それにしても、またレオ君の服に勲章が増えたね」

「レオ君は、こういう場での挨拶に慣れているんだね。堂々としていて偉かったわ」

ようやく挨拶が終わって、席に戻った僕をフレアさんとミシャさんが褒めてくれる。

疲れてへにやっとしている僕の頭を、フレアさんとミシャさんが撫でた。

そんな様子を見ながら、ボーガン様とチェルシーさんがこちらへやってきた。

「正直なところ、フレアとミシャにも勲章をやるとしたんだが、それだとレオ君の功績を過小評価することになりそうだな」

「『いえいえいえ、私たちは勲章は大丈夫です』」

フレアさんたちは手を首の前で振りながら遠慮していた。

僕としては、フレアさんもミシャさんも大活躍だったし、勲章をもらっても問題ないと思ったけどな。

こうして、緊張しきりの新年の挨拶を何とか乗り切ったのだった。

新年の挨拶後、仕事のない安息日に町を散策したり、シロちゃんとモグちゃんが先輩としてユキちゃんに色々なことを教えたりと、徐々に普段の生活に戻ってきた。

ユキちゃんは簡単な回復魔法を使えるようになり、僕たちと一緒に治療の依頼を受けられるようになった。

そんな僕の今日の予定は、ボーガン様のお屋敷で礼儀作法の勉強だ。

「えっと、こうでいいですか？」

「はい、良いですよ。きれいにできていますわ」

色々な貴族に会ったり叙勲や表彰の場に出たりする機会が多い僕のことを考えて、ボーガン様が

きちんと礼儀作法を学べる場を設けてくれたのだ。

僕としては、普通に冒険者活動をして平和に暮らせればいいのにとだけ思っていたけど、そうもいかないみたい。

ちなみにシロちゃんも一緒に礼儀作法を勉強していて、とても飲み込みが速い。

「マリアナ先生の教え方が上手だから、僕もすぐに覚えられます」

「あら、嬉しいことを言ってくれますわ。でも、ここまでできているのは、レオ君が同年代の子よりも比較にならないくらい賢いからですよ」

それから少しして勉強の時間が終わった僕は、応接室で休憩することにした。

「あうー」

「あらあら、アンソニーはお兄ちゃんと遊んでほしいのかしら？」

僕の横にアンソニーちゃんを抱っこしたスーザンさんがいて、アンソニーちゃんが手を伸ばしなから僕の袖を引っ張っていた。

僕がアンソニーちゃんに指を向けると、手を伸ばしてぎゅっと掴んできた。

赤ちゃんの手って、本当に小さいな。

ガチャ。

「おお、皆ここにおったか。アンソニー、おじいちゃんですよー」

「あうあう」

ボーガン様が部屋に入り、アンソニーちゃんを抱っこしてから座った。

普段はとってもキリツとして威厳のあるボーガン様だけど、アンソニーちゃんの前ではデレデレみいだ。

「うにゅ？」

ちよんちよん。

「ははは、アンソニーはおじいちゃんのおひげに興味があるのかな？」

アンソニーちゃんはボーガン様を怖がることなく、抱っこされながらクイクイとボーガン様のおひげを触っていた。

ボーガン様は、アンソニーちゃんにおひげを気に入ってもらえてご機嫌な様子だった。

やっぱり、赤ちゃんの可愛さは誰にでも効くんだ。

しばらくアンソニーちゃんを可愛がっていたボーガン様が、何かを思い出したようにこちらに向き直った。

「おっと、アンソニーだけじゃなくてレオ君にも話があったんだ。よっと」

「うー」

ボーガン様がスーザンさんにアンソニーちゃんを渡す。当のアンソニーちゃんは、ボーガン様のおひげで遊べなくなっちゃってちょっと不満そうだ。

ところで、僕への話ってなんだろう。

ボーガン様がソファアに座って、僕に話し始めた。

「レオ君、ディフェンダーズ伯爵家のマンデラは知っているな。そのマンデラからレオ君へ急ぎの依頼が来ている」

マンデラ様って、白髪交じりのちよつとぼつちやりした人だよね。

とても感じの良い人だったけど、何かあったのかな。

「ディフェンダーズ伯爵領も帝国と国境を接しているが、どうも兵の怪我人が多いらしい。そこで、レオ君に治療を頼みたいそうだ」

「そういうことでしたら、すぐにでも行かないと駄目ですね」

「うむ、レオ君ならすぐに引き受けてくれると思ったよ。レオ君の師匠である、フレアとミシャにも同行を依頼する。国軍絡みでもあるから、国からの依頼も兼ねている」

僕としては、依頼主云々は特に気にしてない。困っている人がいるなら助けてあげたいという思いだけだ。

シロちゃんだけでなく、モグちゃんとユキちゃんも、頑張るぞって気合を入れていた。

「出発は明日朝で、到着までに二日間かかる予定だ。サンダーランド辺境伯家の軍も一緒に行くし、私の代わりとしてマシューも同行させる」

なかなかの大部隊だ。てつきりフレアさんたちと三人で行くのだと思っていた。でも、国に関わることだからそれだけ厳重な警備をしないと駄目なんだろう。

急に決まったディフェンダーズ伯爵家行きだけど、しっかりとお仕事をしてこないと。

僕もシロちゃんたちに負けじと、ふんすって気合を入れたのだった。

翌朝、僕はフレアさんとミシャさんとともにサンダーランド辺境伯家の屋敷に向かった。

屋敷の前にはすでに部隊が編成されており、貴族服に身を包んだマシューさんが兵にあれこれ指示を出していた。

「「おはようございます」」

「プイ！」

「アオン！」

「おお、おはよう。朝早くからすまないね」

僕たちはマシューさんに挨拶し、そして準備を整えた部隊に目を移した。

「十人以上の部隊なんですね。しかも、とっても強そうな人たちばかりです」

「正式に援助を求められたからね。それでも、受け入れ側の負担を考えて人数は絞ったのだよ。さあ、そろそろ出発するぞ」

マシューさんに促されて、僕たちは馬車に乗り込んだ。

前にボーガン様と一緒に乗ったことがある、とても豪華な馬車だった。

フレアさんとミシャさんはあまりの豪華さにおっかなびっくりしていて、恐る恐る席に座った。

「道中気をつけてな」

「父上、行ってきます」

「いってきます」

見送りに来てくれたボーガン様に、僕はマシューさんと一緒に馬車の窓から手を振った。

フレアさんとミシャさんは、気持ちを落ち着かせるためにモグちゃんとユキちゃんを抱きしめてもふもふしていた。

ディフェンダース伯爵領への旅路は、本当に平和そのものだった。定期的にサンダーランド辺境伯家の兵が街道を巡回しているので、動物や魔物に襲われることもなかった。

最初は豪華な馬車に気圧されていたフレアさんとミシャさんも、モグちゃんとユキちゃんをもふもふしたおかげでリラックスしたみたいだ。

道中立ち寄った町の宿で一泊し、それからもう少し馬車での移動を続けると、いよいよディフェンダース伯爵領に到着した。

「わあ、大きな町が見えてきました！」

「ブイ！」

「アオン！」

なだらかな丘の上にとても大きな町があり、街道を多くの人が歩いていた。

そんな賑やかな様子に、僕たちは釘付けになっていた。

フレアさんとミシャさんはディフェンダース伯爵領に來たことがあるらしい。交易の中継点としてとても栄えていると僕に教えてくれた。

人々の喧騒を横目に僕たちを乗せた馬車は進み、とつても大きなお屋敷の前に到着した。

事前に話を通してあるので、僕たちの一団は屋敷の敷地の中に入り、玄関前に案内された。

すでにマンデラ様が僕たちを待っているのが見えた。

僕たちは身だしなみを整えて馬車から降りた。

「マシュー殿、忙しいところかたじけない。それから、レオ君もわざわざすまん」

「同じ国境を守る者同士ですから。何かありましたらすぐに駆けつけます」

「お久しぶりです、マンデラ様。僕も、治療を必要としている人がいるなら一生懸命頑張ります」

マンデラ様は、ユキちゃんと会うのは初めてのはずだけど、特に気にする様子もなく分け隔てなくにこりとしながら握手してくれた。

そして、僕は同行しているフレアさんとミシャさんをマンデラ様に紹介した。

「マンデラ様、こちらがフレアさんとミシャさんです。僕に新しい魔法を教えてください！」

「おお、そんなすごい冒険者が同行しているのか」

「あの、その、恐縮です……」

僕の紹介にフレアさんとミシャさんは顔を真っ赤にして謙遜^{けんそん}していた。でも僕からしたら、すごい冒険者なのは間違いない。

僕たちは応接室に移動して休憩してから、町の治療施設に向かうことになった。

応接室では、二人の女性が僕を出迎えてくれた。

二人とも赤い髪色をしていて、中年女性はロングヘアでスタイル抜群、とても優しそうな雰囲気の人だった。もう一人は僕よりも年上のセミロングヘア女の子だ。

マンデラ様が、二人のことを僕たちに紹介してくれた。

「妻のハルカと、娘のヒカリだ。二人が今日の治療に同行する」

ハルカさんとヒカリさんが、マンデラ様に紹介されてから深く一礼する。

それからヒカリさんは顔を上げると、ニコニコしながらフレアさんとミシャさんの手を取った。

「わあ、あの紅のフレアさんと双剣のミシャさんですね！ 直接会えるなんて！ すごいです！」

「きよ、恐縮です……」

ヒカリさんのテンションの高さに、フレアさんとミシャさんはちょっと戸惑っていた。

でも、元々フレアさんとミシャさんは二つ名を持っているくらい有名な人たちだし、ファンがいたっておかしくない。

僕はフレアさんたちが憧れのまなざしを向けられているのを見て、嬉しい気持ちになるのだった。

マッシューさんは屋敷に残り、マンデラ様と帝国との国境の警備について話をするとのこと、治療に向かう僕たちと別行動になった。

僕たちは、ハルカさん、ヒカリさん、護衛の人たちとともに屋敷近くの教会にある治療施設に向かった。

「ハルカ様、お忙しいところお越しいただき感謝申し上げます」

「司祭様こそ、お忙しい中、出迎えていただきありがとうございます」

教会に着くと、すぐに司祭様が僕たちを出迎えてくれた。

そして、治療施設担当のシスターさんが、僕たちを患者のもとに案内してくれる。

最初に大怪我を負っている兵を治療することになり、治療施設の個室に入った。

「う、うう……」

「あつ、酷い怪我です……」

体の複数箇所に怪我を負って包帯でぐるぐる巻きになっている兵を見て、ヒカリさんはショックのあまりハルカさんの服の裾を掴みました。十歳になったばかりの女の子が見るには、あまりに変かしれません。

ただ、ハルカさんはとても冷静にヒカリさんに話しかけます。

「ヒカリ、貴女は将来のディフェンダーズ伯爵家を背負う者です。目の前の現実を、しっかりと受け止めないとなりません」

「はっ、はい！」

ハルカさんからちよつと厳しめの激励が入り、ヒカリさんは少し気を引き締めたようだった。僕は、さっそく魔力を溜めて、怪我をしている人に放った。

シュイン、びかー！

「ううう……すうすう」

「えっ、も、もう治療が終わったの？ すごい……」

僕がすぐに治療を終えると、ヒカリさんは目を丸くしてびっくりしていた。

付き添ってくれたシスターさんも固まっていた。僕の治療を見慣れていたフレアさんとミシャさんが、怪我をした人の包帯を代わりに外してくれた。

無事に怪我が治ったのを確認し、僕たちは次の部屋に向かった。

その後も順調に重傷者を治療していく。そのたびにヒカリさんは驚いていた。

シロちゃんやユキちゃんもとても張り切って治療し、ニコニコのハルカさんに撫でられてとても機嫌だった。

モグちゃんは、いつの間にかハルカさんに抱っこされてもふもふされていた。

フレアさんとミシャさんも手早くベッドメイクなどを手伝っていて、ヒカリさんにその手際の良さを絶賛されていた。

そして、僕たちは最後の個室に入った。

「うう……」

「あつ、手、手が無い……」

ベッドで苦しそうにしている兵は、左手首から先を失っていた。

ヒカリさんは、衝撃的な光景に思わず絶句して口に手を当てていた。

ここは、僕とシロちゃんの合体魔法の定番だね。

「じゃあ、シロちゃん頑張ってやろうね！」

シロちゃんが触手をふりふりとして了解の意を示してから、魔力を溜め始めた。

シュイン、シュイン、シュイン、シュイン。

「な、なんですの？ ま、魔法陣がたくさん現れましたわ」

怪我人を中心に出現した複数の魔法陣を見て、ヒカリさんはかなり戸惑っていた。

ハルカさんもこれには緊張の面持ちを浮かべ、シスターさんも固唾を吞んで見守っていた。

「いきまーす、えーい！」

シュイン、シュイン、びかー！

個室の中が、回復魔法の青っぽい光と聖魔法の黄色っぽい光に包まれた。

僕とシロちゃん以外の全員が、治療の様子を真剣に見ていた。

程なくして個室を包み込んでいた眩い魔法の光は収まり、普段の光景に戻った。

「ふう、無事に手の再生が完了しました。他の怪我也全部治療しました」

僕とシロちゃんは、やりきった表情をしながら伝えます。

しかし、他の人たちはそれぞれが驚きの反応を示していた。

「う、う、うそ。そんな、手首が再生しています……」

「こ、これが噂に名高い『黒髪天使様』が起こす奇跡……」

ヒカリさんは信じられないものを見たって表情をしながらユキちゃんを抱きしめており、シスターさんに至っては床に膝を突き、手を組んで祈り始めてしまった。

フレアさんとミシャさんは、思わず苦笑している。

「やはり噂で聞くのと実際に目で見るのでは、全然違うね」

さすがに欠損した部位を完全に再生するのは、領主夫人として肝の据わっているハルカさんをもつてしても信じられない光景だったみたいだ。

何にせよ、個室に入院している重傷患者の治療を終えることができた。

全員がある程度落ち着いたところで、応接室に移動して休憩することにした。

「とても可愛いレオ君が、『黒髪天使様』と言われる理由がわかりました。それに、苦しそうにしている怪我人にも笑顔で接していて、本当にすごいと思いました」

ヒカリさんは、お茶を飲んでようやく気持ち落ち着いてきたようだ。

シスターさんも、何度も頷きながら何とか自分を納得させているみたいだ。

「アマード子爵領で、司祭さんから合体魔法のヒントをもらったんです。回復魔法は怪我人の回復

力を高めて、聖魔法は魔法使いの生命力をコピーして怪我の治療を行います。でも、僕一人だと聖魔法の魔力が足りない。そこで、シロちゃんに聖魔法をかけてもらうことにしたんです」

「理論的にもきちんと裏付けされているけど、それを実現できる力と技術があるのがレオ君のすごいところだわ」

ハルカさんは、お菓子とお茶を召し上がりながら、僕の治療方法をとても褒めてくれた。

もしかしたら、ハルカさんはサンダーランド辺境伯家から僕とシロちゃんの合体回復魔法をすでに教えてもらっていたのかもしれない。

話も一段落したところで、ハルカさんが僕にある提案をした。

「レオ君、大部屋に重傷患者はもういないから、シロちゃんかユキちゃんをヒカリと一緒に行動させてくれないかしら。今後のためにヒカリに治療の経験を積ませたいのよ」

「アオン！」

僕の返事よりも先に、ユキちゃんが元気よく手を上げながら返事をしていた。

ユキちゃんも保護した時よりもずっと魔法が上手になり、今では僕たちと同じくらい治療の依頼を受けられるまでに成長していた。

シロちゃんも了解と言わんばかりに、触手をふりふりしていた。

ぴょん。

「わあっ、ふふ。さっそく、私のところにシロちゃんがやってきたわ」